

令和3年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「夢・発見・実現」。総合学科高校の特色を活かし、「ドリカム」授業をコアカリキュラムとし、各系列での学習を通して生徒の興味や関心に応じた幅広い知識や技能を習得させるとともに、学校全体での人権教育・生徒支援・生徒指導のうえに、キャリア教育・教科指導等を密接に連携させて、きめ細かい支援・指導を行い、生徒一人ひとりの「進路実現」を具現する。

- 1 将来に夢と希望を持ちながら自己の具体的なキャリアビジョンを設定し、実現に向け粘り強く継続する力を育成する。
- 2 多様な社会の流れや課題の本質を理解し、高い自尊感情を持ちながら変化の時代を生き抜く力を育成する。
- 3 地域との繋がり人との繋がりを大切に、互いに助け合い高めあう関係を築くことのできる力を育成する。
- 4 「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学選抜」実施校として、外国にルーツを持つ生徒への適切な支援を行うとともに、多文化共生を推進する。

2 中期的目標

- 1 「夢・発見・実現」より「夢から発見」一夢を見つけて将来に向けた力をつけるキャリア教育を推進するー
 - (1) 「ドリカム」をコアカリキュラムと位置づけ、全ての授業との関連を持たせつつ、自分で考え自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
 - ア 3年間を見据えたグループ学習等を通じて主体的に学ぶ意欲を養い、多様な出会いや体験を通じて自分の将来像を描く中で、自尊感情や社会的有用感に富んだ人間性を育成し、生徒に自己実現させる。
 - イ 3年生課題研究において、自分が選んだテーマを研究し、論文にまとめ、プレゼンテーションすることを通じて、視野を広げ伝える力を育みながら、自らの個性・生き方を磨き、自らの進路を切り開く力を育成し、生徒に自己実現させる。
 - ウ 学校外の協力も積極的に導入し、生徒の基礎学力と学習意欲の向上をめざして多様な進路を保証する。大会・コンテスト・検定等に積極的に挑戦し、生涯を通じて学ぶ力を身につけさせ、幅広い進路を確保して、生徒に自己実現させる。
- 2 「夢・発見・実現」より「発見から実現」ー総合学科の特色が最も現れる「授業」を大切にするー
 - (1) 生徒の実態等に基づき、基礎学力を定着させるとともに、興味関心・進路希望に応じた教育内容を創造し、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - ア 新学習指導要領の導入に合わせ、系列等の選択科目を刷新し、総合学科としてカリキュラムの充実を図り、生徒の学習意欲を向上させる。
 - イ 学び直しや少人数展開授業の実施等により、文章読解の力など基礎学力の定着を支援し、生徒の学習意欲を向上させる。
 - (2) 主体的・対話的で深い学びを実現した授業づくりを進め、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - ア ICTー1人1台端末ーを活用する授業改善を行い、府教育センターの研修等にも積極的に参加し、授業力を磨いて生徒の学習力を向上させる。
 - イ 「主体的・対話的で深い学び」の推進のため、校内研修や授業見学等を行い、教員全員が相互に実践を共有して生徒の学習力を向上させる。
 - (3) 「総合学科」の特徴を生かし、「総合学科」らしい進路を含めて、進路決定率90%（H30：88%、R1：87%、R2：88%）。
- 3 「夢・発見・実現」に打ち込める学校ー安全で安心な学びの場づくりー
 - (1) 生徒一人ひとりをサポートする人権教育・生徒支援・生徒指導の一層の充実を図り、生徒の不安を解消する。
 - ア 保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒支援・生徒指導を行う。
 - イ 学校行事や交流活動などの生徒が生き活きと活動できる場を3年間見通した活動の中で提供する。部活動については引き続き重点項目とし、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに生涯を通じて継続的に取り組む力を育成する。
 - ウ 日本語指導の必要な生徒について、母語指導の充実や進路への取組みを進めるとともに、学校全体で多文化共生の取組みを進展させる。
 - (2) 教職員が学校経営計画のもと志を一つにし、互いに協力し合う中でチームとして機能する職場づくりを推進する。
 - ア 担任だけでなく副担任も含め、情報共有を密にしなが、全ての教職員が適切かつ丁寧な指導できるよう、チームワークを活かし学年団として対応し、生徒が安心して相談できることに努める。
 - イ 校内研修やディスカッションを通して経験の少ない教員のOJTを図り、併せてミドルリーダーの育成を図る。
 - ウ 年齢構成等、教員集団の現状を踏まえたうえで、教職員一人ひとりの意識改革と学校全体のチーム作りを図り「働き方改革」に取り組む。
- 4 「夢・発見・実現」のための連携ー「キャリアパスポート」の継承、地域や保幼小中高連携との推進ー
 - (1) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成により地域とのつながりを充実させる。
 - ア これまで培ってきた幼保小中との連携、地域連携のネットワークを基盤に、地元根づいた「開かれた学校」づくりを一層推進する。
 - イ 学校運営協議会及び学校教育自己診断等を活用し、保護者や地域のニーズを反映した学校改善に取り組むとともに、「キャリアパスポート」を引きつぎ、また「豊川教育コミュニティネット」の一員として中学校や地域とのネットワークを強化し、総合学科高校としての情報を積極発信する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [R03年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>生徒のアンケート29項目のうち、27項目で2～20%好転した。低下の2項目、学校楽しい：2%↓は長引くコロナ禍、HP：6%↓は他のメディアの充実が理由。</p> <p>上昇のうち行事：20%↑、生徒会・部活：16%↑は、不十分でも行えたことへの喜びの数。災害への備え：17%↑、意見を聞く：13%↑、困りごと対応14%↑、プライバシー：14%↑、先生協力：13%↑、先生責任：11%↑、親身：10%↑、命・社会・人権：10%↑等については、コロナ禍の中でもできる限り生徒に寄添おうとしたことが伝わったと自負。設備：15%↑、機材：11%↑はトイレ改修、1人1台端末やプロジェクターの整備の成果。端末整備は教え方の工夫：15%↑、授業10%↑にもつながっている。基本的な習慣の確立：15%↑、指導に納得：12%↑は、コロナ禍でとかく悪化しがちな環境下で、学校の安心・安全を保てた成果。豊かな心・生き方：12%↑、将来：10%↑は「夢・発見・実現」にむけた総合学科・ドリカム授業の成果。来日した生徒：14%↑、地域交流：10%↑は日本語指導、開校以来地元とのつながりを大切にしてきたということがより良く伝わったことと判断する。3年連続定員割れしているが、本校生徒・教員の意識は高く、充実している。</p>	<p>第一回（6/11開催：授業見学）地元にとって本当に必要な学校。生徒数は減っているが、地元からは多い。福井ならではの部分をさらにアピールしてほしい。生徒はしっかり授業を聞いていると感じた。特に1年生はこの前まで中学生だったのかと思うほど今後は楽しみ。大学にも多く進学していることを発信するとともに、希望者を早くから集めて意識を高めあう取組みを。</p> <p>第二回（11/17開催：授業見学）PCをノートのように使ったり、興味をひくよう実験から授業に入ったりしているのがいい。先生の一方的な説明ではなく、生徒の意見を取り入れて授業をしていたのもいい。主体的に参加してみようと思える楽しい授業になってきている。ここ数年で学校がより落ち着いてきていると実感していたが、生徒たちの様子を見てさらに安心した。コロナ禍でできなくなったことは、なくても大丈夫なことへの気づきにもなったはず。変革のチャンス。</p> <p>第三回（2/24開催）教員への生徒の評価があがっているのは嬉しい。コロナ禍にもかかわらず良い結果が出ている。障がいがある生徒や日本語指導が必要な生徒と共に学ぶことは有用。支援体制も進んでいる。ただ教員の過ぎた超過勤務は良くない（働き方として悪い見本）。生活福祉・障がい福祉・多文化・コロナ禍などの困難な状況については学校だけで抱えず、府教育庁・府などへも支援を求めべき。それが気づいているものの責務。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R2年度値]	自己評価
「夢・発見」 キャリア教育の推進	(1)「ドリカム」を全ての学びの中心に ア、グループ学習の実施 イ、課題研究の充実 ウ、各種挑戦の奨励	(1) ア、プロジェクト学習や多様な社会人と出会いを通じて、生徒に進路や生き方について考えさ、自己有用感を向上させる。 イ、ドリカムルーム・LAN 教室をフル活用する。ICT-1人1台端末も積極活用し、ドリカムフェスタ(総合学科発表会)も充実させ、自己肯定感を向上させる。 ウ、大会・コンテスト・資格等への挑戦を奨励し、コロナ禍中でも前向きな目標を設定して努力する姿勢を育成する。	(1) ア、自己診断アンケートの進路・生き方についての肯定的回答：80% [81%]。 イ、総合学科卒業生アンケートの「ドリカム」関係の肯定的回答：75% [79%]。 ウ、競技団体や認定団体等主催の大会・コンテスト・資格等に挑戦したものや校内での取組みが優秀であったものへの「福井高校賞」授与者数について50名をめざす [61名]。	(1) ア：90% (◎)、イ：77% (○)、ウ：98人 (○)。 ・学校教育自己診断(以下：診断)では29項目中27項目が、総合学科卒業生アンケート(以下：卒アン)では全10項目のうち9項目で満足度がUPした。総合学科の特徴を生かし、進路・生き方について、一人ひとりに寄り添った学習を進めた結果と自負する。但し、ドリカム2項目のうち1つ：進路や社会参加で数値が低下した。コロナ禍での変化を追い切れていない側面や、良き教材でも変わりゆく環境の中で入れ替えるべきものが出てきていると押さえ次年度に向かう。 ・ドリカムでは、今回も大学ホールを借りてのフェスタを行えなかったが、3年が1・2年の教室を回ってプレゼンしていくスタイルに、各学年での発表の場も設けた発表大会を行い各学年好評・自己肯定感も上げた。 ・大変困難な状況の3年生の就職希望者についても高い決定率：94%で、中にはコロナ禍中、自分で北海道まで出向いて酪農関係の就職を決めてくるなど、総合学科らしい進路を達成するものも出た。 ・福井高校賞については、部活の成績や資格の取得などで目標の2倍、98人を表彰することができた。
「発見・実現」 確かな学力の定着	(1) 興味関心・進路希望に応じた教育内容の創造 ア、選択科目の精選と内容の充実 イ、少人数展開授業・文章読解・学び直しの内容の向上 (2) 主体的対話的な授業による学習意欲の向上 ア、授業改善の取組み イ、学習力向上のための研修の実施	(1) ア、総合学科の特徴を生かして生徒の興味関心やキャリア形成に有用な科目設定・授業展開を行い、生徒に自己実現させる。 イ、英数では習熟度別授業を実施するとともに、全教科で読解力の育成と学び直しの要素を取り入れた授業を行い、ドリカムや授業HRではアンガーマネジメントの内容を盛り込む。 (2) ア、観点別評価やICT活用の有用化を目的に、OJT・研修等(府教育センターの研修とも連携させた授業力向上プロジェクトを推進する)を充実させ、生徒の学習力を向上させる。 イ、教員相互の授業見学や研究授業を実施するとともに、各教員の目標に「主体的・対話的」な授業の工夫を設定し、実践を検証する。	(1) ア・イ、卒業生アンケートの「総合学科で学んでよかった」の回答：90% [88%]。 ア・イ、自己診断アンケートの「他の学校にはない特徴」の回答：75% [74%]。 (2) ア、自己診断アンケートの「授業が分かりやすい」の回答：60% [58%]。 イ、自己診断アンケートの「教え方の工夫」の回答：70% [66%]。	(1) 卒アン：90% (○)。診断の特徴：79% (○) ・コロナ禍中、修学旅行にも行けなかった卒業生には不満足だったところも多々あると思われるが、総合学科で学んだことや、日本語指導の特別校で多文化の学校であったことへの満足度は高かったと判断する。 (2) 授業分かりやすい：69% (○)、工夫81% (◎)。 ・授業アンケートを見ると、経験値が高い年配教員の従来型授業より、種々試行錯誤した20～30代の教員の取組みが生徒に好感度だった傾向がある。コロナ禍で従前の授業、特に体験的授業ができない中、それでも1学期中に教員各自に端末を準備し、ICT機材等を活用して新しい試みをする条件を整え、2学期からは1人1台端末も積極的に使用したことの表れとも考える。 ・「授業力向上」のプロジェクトチームが、2年連続して府教育センターのパッケージ研修ともリンクした取組みを校内で計画的・継続的に行い、端末の活用方法を理解するとともに、相互の授業見学や研究授業などを進めて成果を得た。 ・オンライン学習については、端末の貸与や学習支援クラウドサービス等の活用で、飛躍的に良い環境となったが、生徒自宅の環境については引き続き支援が必要な状態が残っている。

府立福井高等学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">安全で安心な学びの場づくりの推進</p>	<p>(1)人権教育と生徒指導等の充実 ア、生徒に寄り添った指導の促進 イ、学校行事や部活動の充実 ウ、多文化共生の取り組み</p> <p>(2)志を一つにする教職員集団 ア、全ての教職員のチームワーク向上 イ、ミドルリーダーの育成 ウ、「働き方改革」への取り組み</p>	<p>(1) ア、職員研修や外部機関・人材との連携を深め、居場所事業を定期開催する。情報共有と細やかな支援により、生徒が「学校生活を楽しい」と感じる雰囲気を醸す。 イ、特別活動をはじめ、集団作りの観点から3年間を見通した取組みを進める。部活動においては学校全体で支援体制を充実させ、加入率をあげ、かつ継続させる。 ウ、日本語指導・母語指導・進路指導の充実と多文化共生の取組みを学校全体で進め、生徒全体の自負とし、学校の特徴にする。特に今年度は、コロナ禍のため多文化ランチ会等は制約されるので、日本語指導のための学習指導員の活用や校内での「やさしい日本語」の利用等を推進する。</p> <p>(2) ア、首席・分掌長・学年主任をコアに生徒連携委員会等、組織での対応力を強化する。 イ、Yプロジェクトを継続し、各業務をチームで行うことを推進し、さらにその姿を生徒に見せて協力の大切さを実感させる。 ウ、一斉退庁日や部活動の休養日の趣旨を徹底し、業務の平準化をすすめて生徒にも「働き方改革」の実際を見せ、将来の働き方を考えさせる。</p>	<p>(1) ア、研修・ケース会議を年間5回以上実施。自己診断アンケートの「学校に行くのが楽しい」の回答：75% [68%]。 イ、体育祭・文化祭・修学旅行を復興し、部活動の加入者を増やす。体育祭・文化祭・修学旅行について自己診断アンケート肯定的回答：70% [53%]。 ウ、多文化共生にかかる自己診断アンケートの肯定的回答：75% [68%]。あわせて人権について学ぶ機会：80% [77%]。</p> <p>(2) ア、自己診断アンケートの「悩みや相談」の肯定的回答：70% [64%]。 イ、自己診断アンケートの「先生はお互いに協力」の肯定的回答 70% [66%]。 ウ、教職員の超過勤務時間を、月 35 時間以下とし、ストレスチェック値をさらに 10 ポイント下げる [8 ポイント減]。</p>	<p>(1) 楽しい：66%(△)、行事：72%(○)。 ・体育祭・文化祭・部活動大会は、縮小でも開催できたので行事はUP。従前からある内容の中からコロナ禍でもできることだけ選んでするのではなく、コロナ禍でもできることを新たに生徒ともに考えて実行したことの成果。あわせてダンス部：全国大会出場。陸上部：府立高校の上位。バスケ部・サッカー部：一定勝つことが当たり前など、少人数校でもしっかり活動できる部活が育ってきたこともある。ただ、楽しいは微減。コロナ禍が続くことへの疲労感がある。あわせて最大の楽しみ、修学旅行の延期も特に2年生のモチベーションを下げることになっている。 ・多文化：81%(○)、人権：87%(○)。 外国ルーツの生徒に日本を学んでもらうだけでなく、母語指導を軸に、母国の文化や考え方も大切に発信する力を養成してきたことが成果となりつつある。日本のことを理解したうえで、母国の文化も自信を持って伝えてくれる仲間が身近にいることは日本の生徒にとっても好ましい。外国ルーツ生徒の自己肯定感向上の取組が好循環を生み出しつつある。</p> <p>(2) 悩み・相談：73%(○)、先生協力：79%(◎)、超過勤務時間(△)：ストレス：6ポイント↓(△)。 ・「生徒連携委員会」を時間割内の定例会議として生徒情報の共有や支援に努めた。SC・SSWとの連携を深める中で、本年度も研修・ケース会議等を10回以上行った。 ・外部連携についても、従前の児童生徒対応の関係先に加えて、茨木市のこども育成部やユース事業展開者とも連携を深め、ユース事業者が週1～2回の頻度で校内居場所事業をしてくださっており、ヤングケアラーなどの支援もより手厚くなってきた。 ・上記のほかにも、地元の方を講師に迎えての職員人権研修を行うなどし、多様な方に校内に入ってもらい、高校への様々な思いを教員が伺ったことも、教員の相談力・生徒支援力の向上につながったとも考える。 ・生徒の指導・支援で連携を深めたことが、生徒から見た先生協力の数値も向上させたと見る。またそのことがストレスポイントも幾分改善させたと考える。超過勤務時間は11月：34.4時間など達成できた月もあるがまだ不十分。</p>
---	--	--	--	--

府立福井高等学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">多文化共生を生かした地域連携、 保幼小中高大連携の推進</p>	<p>(1) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成</p> <p>ア、地域に根ざした学校づくりの推進</p> <p>イ、「キャリアパスポート」を活かした中高連携の構築</p> <p>ウ、地域、中学校に向けた情報発信</p> <p>エ、多文化共生を生かした連携</p>	<p>(1)</p> <p>ア、福祉の授業や、部活のイベント参加などで積極的に地元と交流することを復活し、小中学校での出前授業も充実させる。茨木市や同人権協会・豊川教育ネット等の事業や研修・公開授業等に参加し、「福井高校を育てる会」との連携も強める。</p> <p>イ、「キャリアパスポート」等取組みについて、小中学校との連携を深め、発展的に継承する。</p> <p>ウ、学校の取組みを HP・説明会など地域・中学校に発信するとともに、「福井高カップ」をはじめ生徒主体の取組みを復活する。</p> <p>エ、日本語指導が必要な生徒のための選抜実施校であることを生かし、大学等ともつながる多文化共生の連携を行う。</p>	<p>(1)</p> <p>ア、自己診断アンケートの「地域交流」の肯定的回答を 70% [51%]。</p> <p>イ、生徒が出身中学に出向いてドリカムの成果発表を行うなど、生徒による出前活動を 5 校以上で行う。</p> <p>ウ、自己診断アンケートの「学校の HP を見る」の回答を保護者 60% [56%]。</p> <p>エ、多文化共生の地元連携(小中学校の多文化学習への協力、地域の識字・日本語教室との連携など)を 5 件以上行い、大学等の実習・調査・研究にも複数協力する(日本語教育に係る実習や、多文化共生に係る研究など)。</p> <p>(1)</p> <p>地域交流:61%(△)、出前:(○)、HP:保護者 43%:(△)、多文化:(○)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域主催の交流行事はほぼすべて中止され生徒が参加する場面がなかった。学校間や施設等との交流も主に 10~12 月の 3 ヶ月間でしか行えなかったにもかかわらず 61%に UP した。 ・福祉実習・保育実習など、本来は何度も出向き、顔なじみになって帰ってくるような活動もほぼできなかった。それでも実習させてくださった保育園や施設に感謝。但し、本校のコスモス生(日本語指導)との交流を求める地元小中のニーズは高く、お互いにメンバーが不特定多数ではないので、感染予防対策をしっかりとして積極的に行った。 ・生徒が参加しにくい分は、地域連携担当者等教員が、地元の小中学校のほか、地域の自治会・団体や市域や中学校区の教育ネットワークとのつながりを深めるなどして補い、地元を大切にしていることを伝えている。 ・学校関係のほか老人福祉・施設等との連携や識字教室への協力などでもできる範囲で継続。茨木市の福祉事業者の集まりに参加するなどし、CSW などとのつながりを深めることもできた。また茨木市主催の人権ポスターへの応募など、地元の取組みを大切に活動した。 ・近隣のユース事業者や大学とのつながりでは、こちらも限定したメンバーを積極的に本校内に迎え入れることで内容を深めた。居場所事業は生徒に好感度かつ生徒支援に欠かせない。また大学生の協力では、通常の学習支援等に加えて「おおさか環境デジタルメディアコンテスト」(府環境農林水産部)の団体賞受賞という成果も出た。 ・中学校の取組みを引き継ぐキャリアパスポートについては、社会全体の働き方が変化することでもあり、今後とも有効活用していきたい。 ・HP については、コロナ禍での情報の伝達等で保護者の利用ニーズはあるが、一斉メール等、他の伝達手段が勝る様子(そちらに注力)。
--	---	---	---